

「農と食」 北の大地から

連載第 168 回

農薬や濃厚飼料に依存した酪農を見直す
——根室発「放牧酪農家の考える食と命の会」の試み——

今春、根室管内で放牧酪農に取り組み牛飼いたちが、農薬や除草剤を使わず土を健康に保ち、食の安全性を再考する生産者をめざすグループを立ち上げた。名称は「放牧酪農家の考える食と命の会」で、メンバーは30代から50代までの7人。代表の高橋正明さんは数年前から、海外では遺伝子組み換え(GM)作物とセットで使用されている除草剤「ラウンドアップ」の安全性に疑問を抱き、地元農協の集まりなどで問題提起を続ける一方、自分の牧場の濃厚飼料を非遺伝子組み換えのものに転換。会の仲間たちと一緒に「健康になれる牛乳・牛肉の生産」を模索する。酪農の大規模化が進み、海外産飼料への依存度が高まる別海町で、高橋さんらの取り組みを聞いた。



▲草地更新のために「ラウンドアップ」を散布後、枯れ上がった牧草畑。牧草の播種前に2回、散布を推奨するケースも

▲高橋牧場では5月から、写真の非遺伝子組み換えトウモロコシを毎日、1頭に1キロずつ与える

除草剤とGM作物の危険性を提起 目指す「健康になれる牛乳と牛肉」

GM大豆栽培地の健康被害に
衝撃受け、牛の飼料を換える

酪農が基幹産業になっている根室管内別海町の中西別地区。5月下旬、高橋正明さん(1979年、同町生まれ)の牧場は本格的な放牧シーズンを迎えていた。68ヘクタールの草地で、乳牛65頭(うち成牛50頭弱)を飼う高橋さんは、

濃厚飼料の給与量を控え、適正規模の酪農を営む。この牧場では、生まれてから6カ月経った若牛と親牛と一緒に放牧する。新緑あふれる牧場で人懐っこい牛たちを目にすると、気持ちや和んでくる。牛の主食は草類など繊維質を多く含む粗飼料だが、大方の酪農家は、タンパク質などの栄養素を多く含む濃厚飼料も与える(注)穀物や粕類

など複数の濃厚飼料を混ぜ合わせたものを「配合飼料」という。日本の飼料自給率はきわめて低く、濃厚飼料の約9割は外国産。原材料のトウモロコシや大豆などは、遺伝子組み換え(GM)作物が圧倒的に多い。高橋さんは今年5月、これまで与えてきた配合飼料を使うのを止め、放牧時期は香川県のメーカーから購入した非遺伝子組み換え(ノンGM)

トウモロコシを与えている。冬場は、ホクレン経由でノンGMの配合飼料を購入する予定だ。2年ほど前、GM大豆栽培地のアルゼンチンで散布されている、農薬が原因とみられる深刻な健康被害をフランス人ジャーナリストが追ったドキュメンタリー「遺伝子組み換え戦争」を見た。大規模農場の大豆畑に隣接する村で、奇形や遺伝子異常



酪農家の3代目として65頭ほどの乳牛を飼う別海町の高橋正明さん。牛に食べさせる配合飼料にアルゼンチン産の遺伝子組み換え(GM)大豆が使われていると知り、最近、飼料を換えた。除草剤の安全性にも疑問を投げかけ、仲間たちとともに「放牧酪農家の考える食と命の会」を立ち上げ、発信を続ける

を持つ子どもが多い実態が映し出され、高橋さんは衝撃を受ける(同作品はユーチューブでも視聴可能)。自分の牧場で与える配合飼料の原材料の一つ・大豆油粕には、アルゼンチン産の大豆が使われていた。「あの村の人たちを不幸にして日本の畜産業は成り立ってきたのに、僕たちはそのことも知らずに幸せな暮らしをしている。誰かを不幸にしてまで、自分たちが幸せになっていいのだろうか……」こんな思いを抱き、同国産の大豆は使いたくなかった。GM作物とセットで使われる除草剤「ラウンドアップ」の危険性について問題提起(後述)を続ける一方、今春、別海町と中標津町の30〜50代の牛飼いの仲間7人で「放牧酪農家の考える食と命の会」を設立し、高橋さんは代表を務める。持続可能な酪農のあり方を模索する毎日が続く。

「ラウンドアップ」を使った草地更新のあり方に問題提起「ラウンドアップ」は、1970年に米国のモンサント社が開発した除草剤の製品名だ(成分名はグリホサート)。同社は「ラウンドアップ」を散布しても枯れないGM作物を開発し、セットで使われる。使用量は飛躍的に増加し、今では世界で最も多く使用される除草剤になった。ウェブサイトに「有機農業ニュースクリップ」の「グリホサート関連年表」から、最近の動きを見ておく。2015年、WHOの外部機関である国際がん研究機構(IARC)はグリホサートについて、「ヒトに対する発がん性がおそらくある」とするグループ2Aに位置づける論文を発表。欧州を中心に規制を求める声があがった。翌年には、「EU委員会が加盟国にグリホサートの規制強化を求める」イタリア保健省が公園や市街地、学校、医療施設周辺での使用禁止と農業での収穫前の散布禁止を決定」といった動きに発展。昨年暮れには、フランスなどEU加盟6カ国の農業・環境大臣の連名で、EU委員会に段階的禁止計画の策定を要請する書簡を送った。モンサント社は安全性を強調する活動を展開してきたが、グリホサートによる曝露が動物の内臓に及ぼす悪影響について近年、米国や欧州の研究チームが相次いで研究論文を発表している。

10年前に新規就農した、同会メンバーの近津義尊さん(1974年

「放牧酪農家の考える食と命の会」は、次の「創立理念」を掲げた。

- ①生きものがみんな幸せに
- ②競争ではなく、みんなが幸せに
- ③搾取されず、搾取しすぎない農業
- ④食の安全性を再考する農業生産者
- ⑤健康になれる牛乳・牛肉の生産
- ⑥土壌を健康に保つ(農薬・除草剤の不使用)

「食と命」を基本に見据えて
放牧で本来の酪農をめざす

「放牧酪農家の考える食と命の会」は、次の「創立理念」を掲げた。

内の酪農家(16戸)▽サツラク農協の一部組合員(10戸)▽函館酪農公社に出荷する八雲町の酪農家グループ(7戸)など。全道6千3百戸の酪農家のなかであって、合計40戸余りの少数派といえる。

牧草地を更新する際にも、「ラウンドアップ」がよく使われる。ネット検索すると、道東あさひ農協(本所・別海町)が作成した「草地更新時の除草処理」と題した農家向け資料が見つかった。



ホームセンターに並ぶ「ラウンドアップ」のジェネリック製品

欧州や米国では「ラウンドアップ」の安全性論争が盛んだが、日本では規制が弱く、マスメディアも情報を十分伝えていない。国内での「ラウンドアップ」の販売権は、日産化学工業が持っている。モンサント社の特許はすでに切れており、さまざまな企業がジェネリックの類似商品を作り、ホームセンターの売り場などにも数多く並ぶ(写真を参照)。大方の消費者は安全性に関する情報を知ることなく、これらの商品を買って求めていく。

「わたしの子息は発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」

配合飼料の農薬残留を調べ
「ノンGM」への転換を図る

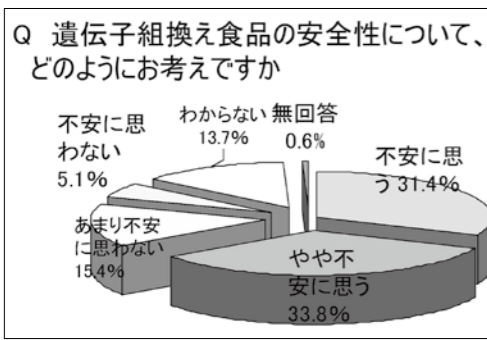
そこで、地元の農協や農業改良普及センターを訪れ、持参したDVDを見せて説明する一方、農協の地区懇談会でも問題提起。「今やっていることは、持続可能な酪農といえるのだろうか?」と考え、放牧酪農の仲間たちとも話を重ねた。

「わたしの子息は発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」

神戸市生まれは、乳牛60頭ほど(うち成牛40頭)を飼養する。海外生活のあと、上川町内の法人経営の牧場などで実習経験を積み、高橋さんが住む中西別地区に落ち着く。

実習前は、子牛が生まれると乳が出ることを知らなかった、と笑う。マイペース酪農の実践で知られる三友盛行さん(中標津町農協の元組合長)の著書を読み、「こんな酪農なら自分もやれるのでは…」と考え、新規就農をめざし、実現させた。

放牧する夏場、配合飼料は与えない。冬場は1日あたり5キロほど食べさせるが、この量は道内平均の半分以下。生産乳量は少なめだが、放牧酪農でゆとりのある生活を手にし



2011年に道が実施した遺伝子組み換えに関する道民意識調査の結果。回答者の65%がGM食品の安全性を不安視した(出典:道農政部資料)

経済や自らの豊かさのために、自然環境や生態系、人間の健康を壊すことは間違っているのではないかと高橋さんは捉えている。

自分の牧場で使う配合飼料が気になる、調べてみた。原材料の61%を占める穀類のうち、トウモロコシは米国とブラジル産、精白米は米国と中国、タイ、大豆は米国産だった。

では、グリホサートや収穫後に使われる農薬は、配合飼料にどれくらい残留しているのか。高橋さんは昨年、北海道エア・ウォーター㈱の環境部門に依頼し、分析してもらった。その結果、0・48PPMのグリホサートを検出。260の農薬成分も調べたが、残留はなかった。「グリホサート検出の原因は、(除草剤が)土壌が作物を経由したものでないか(高橋さん)」

生活のなかで感じた疑問を、書籍や映像、成分分析などを活用して具体的に調べ、実証する。そして、価格にやや割高であっても、より安全・安心なノンGM飼料に転換していく。貴重な取り組みである。

農林水産省の「食料需給表」によると、16年度のトウモロコシ輸入量は1488万トン。米国産とブラジルの。今度の冬から、ホクレンが供給するノンGM配合飼料に換える。

「高橋さんは綿密に調べるタイプだけれど、僕はアナログ人間。農薬やGM作物の危険性を問いたですことよりも、農業本来の姿から離れてしまった酪農のあり方が問題、と考えています。自分の牧場を本来の姿にしていきたい、就農希望者にも見てもらおう。そこから少しずつ社会も変わるんじゃないか(近津さん)」

代表の高橋さんは、今年4月の「マイペース酪農年次交流会」で、除草剤の影響やGM作物などについて発表した。質疑のなかでは、「わたしもノンGMの飼料に換えてみたい(十勝管内の酪農家)」

「消費者がもっと知らないで、未来の子どもたちにも、今を生きるわたしたちにも影響が出る。講演を頼まれたら、来ていただけませんか?」「自給飼料だけで牛飼いをする選択も考えておられるのか?」

「僕も配合飼料とビートパルプ(注)II甜菜の搾り粕)を止めてみた。(年間1頭あたりの)乳量は5千キロですが、人間も牛もすごく楽になった(後志管内の酪農家)」



高橋牧場では、生後6カ月に達した牛を母牛たちと一緒に放牧。生産乳量は少なめだが、適正規模の酪農を追求してきた

産で100%近くを占め、輸入量の77%が飼料用に回された。輸入されたすべてのトウモロコシの89%、同じく大豆の94%はGM作物とされる(バイテク情報普及会の16年推定値)。つまり、家畜の配合飼料に使われる輸入穀物の大部分は、遺伝子組み換えされたものだ。

こうした現状に危機感を持ち、乳業メーカーや消費者などと協力し、非遺伝子組み換えの飼料に転換した酪農家の取り組みもある。

道やホクレンなどの調査によると、現在、北海道内でノンGM飼料を使う生産者は、▽津別町の有機酪農グループ(8戸)や興部町の酪農家など有機畜産の認証農場▽よつ葉乳業や共同購入グループと提携する十勝管



「農業本来の牧場をめざしたい」と話す、新規就農組の会員・近津義尊さん

月10日付「マイペース酪農交流会通信」の関連部分を要約。

「交流会のあと、消費者団体の人から資料の申しについて、酪農家から米国産小麦のゲノム編集について聞かれました。小さな子どもがいる人たちから質問が出て、良かった」と高橋さんは手応えを感じている。

そして、今後については、こう続けた。「僕が一番やりたいのは、大人の食育。ドキュメンタリー作品の上映会などで消費者に情報を発信しつつ、さまざまな放牧のスタイルを多くの人に伝えていきたいですね」

道東の酪農地帯で始まった若手の牛飼いたちの取り組みには、明日への希望を感じる。これからの活動の広がりに期待したい。

■放牧酪農家の考える食と命の会
別海町中西別179-9 高橋方
☎090・7519・8509